

CROSS POINT

Vol.3

クロス
ポイント

創価学会の青年世代のリーダーと各界のオピニオンリーダーが語り合う電子版連載「CROSS POINT」。第3回は、評論家の與那覇潤さんと創

価学会青年部長の西方光雄さんが登場。「宗教者の政治参加」をテーマに意見を交わしました。
(聖教電子版8月26日配信、創価新報9月号掲載)

テーマ 宗教者の政治参加

「お祭り」すら 個人化する社会

西方 7月7日に実施された東京都知事選挙ではSNSやAIなどを駆使した青年世代の候補たちが、これまで政治に無関心だった若者・無党派層に支持を広げ、話題を呼びました。今回の都知事選をこのように捉えておられますか？

與那覇 「既成政敵離れ」を指摘するメディアもありましたが、それはだいぶ前からの動向です。よね、むしろ私が今回強く感じたのは、「政敵」という概念が離れている、ということではないでしょうか。

「高度経済成長期を経た日本は成熟社会を迎え、地縁や血縁といったつながりが薄れ、個人化が進みました。他人との関わりは煩わしいものとされ、自分が思うままに生きることが推奨されるようになった。その結果、今や、特定のコミュニティに属することなく、一人で生きるライフスタイルが定着し、集団でアクションを起

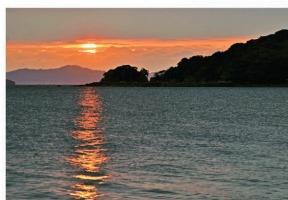


こすという発想が生まれづらくなっています。

動議をバラバラにスマホで見て盛り上がり、個々人で拡散する。リアルな演説会も各個人のSNSにアップするのが目的だから、短く終わって仲間意識もなく解散。「選挙はお祭り」とよく言われますが、もはやその「お祭り」すら個人化した光景は衝撃でした。

西方 こうした意識の変化は政治の世界に限ったことではないと思います。例えば、無宗教を自認する友人や知人と対話するなかで、宗教そのものに対する抵抗感よりも、「一つの集団に属する」とことへの抵抗感を強く持っている人が多いのではないかと感じています。

與那覇 同感です。より身近な例でいえば、職場での「飲み会離れ」とも相似形がみられます。1995年に出版した『やさしさの精神病理』(台成新書)の中で、「やさしさ」という言葉の意味合いの変化に着目し、社会の個人化が人々の感覚自体を大きく変えたことを論じています。



熊本・水俣湾の夕日

代には、「相手は相手」「自分は自分」として、他人の内面にはむしろ踏み込まないのが「やさしさ」の定義になった。この「相手と自分」の線引きは、その後エスカレートし、SNSが定着した平成の末期には「相手に近づいた平成の末期には「相手に近づいた平成の末期には「相手に近づいた平成の末期には」

ず、お互いの意見がモデレート(穏健化)され、対立や分断も減っていく。私たちが創価学会の活動は、ある意味でその「面倒くさい」ことに積極的に関わっていくことだともいえます。

西方 「人は自由に生きた方がよい」という行きすぎた個人化は、もはや限界にきているといえる。むしろ、面倒くさい部分もありますが、顔を突き合わせて一緒に考えた方が、考えが総躍りになる。

4面に続く

評論家

與那覇 潤

創価学会青年部長

西方 光雄

よなは・じゅん 1979年、神奈川県生まれ。東京大学大学院博士課程修了。公立大学准教授として日本近代史を教えた後、2017年に病氣離職し、評論家に。『中国化する日本』『知性は死なない』(文春文庫)、『平成史』(文藝春秋)など著書多数。

にしかた・みつお 1984年、大阪府生まれ。創価大学卒。創価学会の学生部長、男子部長等を歴任。SGIユース共同代表として、本年3月に開催された「未来アクションフェス」では、実行委員会の一員として携わった。

ご感想をお寄せください。

メール youth@seikyo-np.jp ファクス 03-5360-9470

緑のバトン やさしい未来へ

大王グループは環境配慮型企業として
地球の再生を目指し、
持続可能な森林経営を行っています。

詳しくは
こちら▶